商大プレクトラムアンサンブル　12/1定期演奏会

2019/10/28　イベント・観光, スポーツ・教育, 文化・歴史・芸術

ツイー　いいね！ 0　シェア　B! 0　Pocket 0　LINEで送る

小樽商科大学(緑3)の学生団体マンドリン・オーケストラ「プレクトラムアンサンブル」(中野彩夏部長)は、第51回定期演奏会・マンドリンコンサートを、12月1日(日)14:00から、小樽市民会館(花園5)大ホールで開く。

中野部長は、「1人でも多くの方に聴いてもらい、興味を持っていただければ」と来場を呼びかけた。

同部は、創立51年を迎えた伝統あるサークルで、現在、1～4年生44名が所属し、マンドリンの他に、マンドラ・マンドセロ・クラシックギター・コントラバスで構成し、繊細で澄んだ音を奏でる魅力あるコンサートを行なっている。定期演奏会は集大成となり、一致団結した力の見せ所だ。

3年生が主体となり、部長やコンサートミストレス、広報など、しっかりとした組織で運営し、札幌市民芸術祭や同大入学式、地域のイベント、ホテルやレストラン、老人ホームでも演奏を披露している。

選曲も3年生が行い、3部構成のプログラム。1部と3部は、「群炎Ⅱ」や「オリエントの航跡」など、マンドリンクラシックを集め、2部は、ポピュラーな馴染みのある曲で、全10数曲を盛り込み、各パートリーダーのアンサンブルや楽器の紹介もある。

広報担当の諸越真鈴さんは、「HPもリニューアルし、パンフレットもデザインを変えた。これまでのメインターゲット層だけではなく、学生世代にも広げたい」と話した。

チケット取扱店:小樽市民会館(花園5)、小樽商科大学学生生協(緑3)、玉光堂小樽本店(稲穂2)。前売400円・当日500円・小学生以下と65歳以上無料、11月初旬発売開始。

北海道新聞　令和元年10月31日（朝刊）

小樽・北前船寄港地フォーラム

絆、繁栄 海路がもたらす

江戸から明治期にかけて北海道と本州を往来して物資と文化を運んだ「北前船」の寄港地が連携し、地域活性化につなげる「第28回北前船寄港地フォーラム」（実行委主催）が19、20の両日、日本遺産「北前船寄港地・船主集落」に昨年認定された小樽と石狩の両市で開かれた。「北前船往来～日本の繁栄と近代化を支えた絆をふたたび～」をテーマにした2日間のフォーラムのうち、小樽市築港の商業施設「ウイングベイ小樽」で有識者の講演や中高生の研究発表が行われた19日の内容を詳報する。

北前船の寄港地から関係者が集い、歴史や地域活性策を考察したフォーラム＝19日、ウイングベイ小樽

北前船　大阪を起点に瀬戸内海と日本海沿岸を経て北海道まで往復し、寄港地で積み荷を売って日本海側を「北前」と呼んだことに由来するとされる。北海道へ向かう下り船はコメ、塩、酒、木綿、ろうそくといった近畿や瀬戸内の産物を、北海道から出る上り船はニシンかすやコンブ、サケなどの海産物を運んだ。この交易で道内は小樽、石狩、松前、江差、函館が栄えた。

基調講演　東京国立博物館館長　銭谷（ぜにや）　真美（まさみ）氏

海産物や着物、民謡も流通

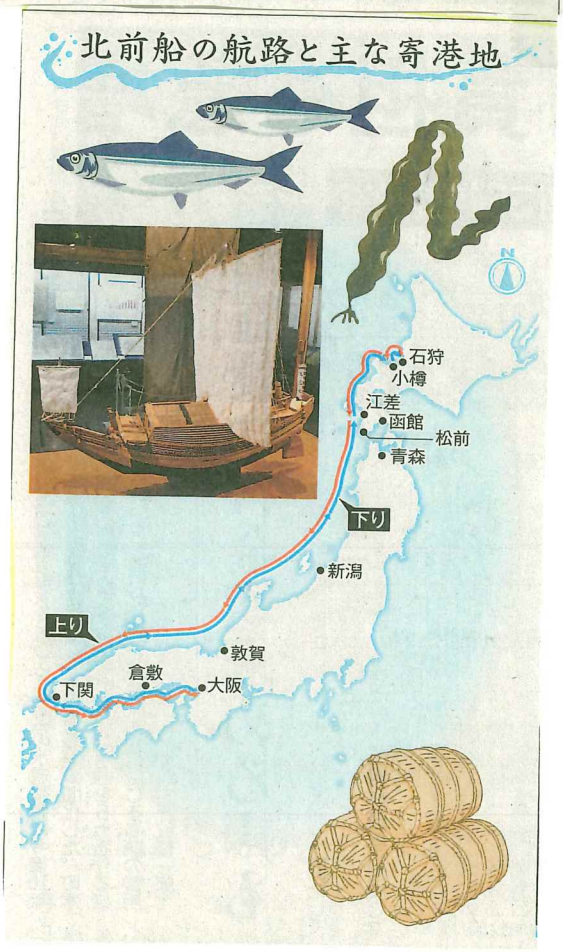
北前船は船主自らが物を売り買いする「買積船」で、価格差でもうけていました。北海道から（京都や大阪の）上方に来る「上り荷」の方がもうかりました。

上り荷の代表はニシンとコンブで、いずれも北海道から全国に運ばれました。全盛期には敦賀（福井県）に1年間で2670隻の船が来てコンブを積み降ろしした記録が残っています。

ニシンはシメかすの方が多く、関西や中国地方で綿の肥料になり、その木綿で着物を作って北海道で売るという循環ができます。山形ではシメかすを肥料に作った紅花から紅を取り、京都で頬紅や口紅にしました。シメかすは四国でミカンや藍の肥料にもなり、シメかすを通した経済交流が盛んに行われました。

北前船の寄港地では乗組員の宿泊や物資の交流が行われ、人の行き来により文化の交流もありました。例えば、石川県の山中節は酒田追分から、酒田追分は江差追分にーと北前船を経由しながら民謡が全国に広がったと考えられます。

経済や人、文化の交流を生み各地が栄える元になったのが北前船です。今後の都市づくりを考える際、交流を通し広域で繁栄を図る姿勢が大事だと思います。



次のページに続きます（全2ページ）.

前のページから続きます。

3氏が地元との関わり語る

多様なビジネスを展開

北海道北前船調査会　高野（たかの）　宏康（ひろやす）氏

江戸時代、松前城下の福山湊が北前船の交易港となり、京都の桜が松前藩にもたらされました。函館は東蝦夷地（えぞち）が幕府の直轄領となってから産物が流通し、北前船主の高田屋嘉兵衛が町並みを整備しました。

石狩は幕末から北前船が来航し、ニシン漁場の北部（厚田・浜益）、サケ漁場の南部（石狩川河口）に寄港しました。両地区に北前船の遺産が残っています。

江戸期後半にニシン漁が始まり、北前船は移民の生活物資を運ぶ新たな役割を担います。小樽に北前船主が進出し、営業倉庫の設立など新ビジネスを展開しました。明治期に漁業や企業の勃興に関わり、時代に合わせ進化した北前船主の足跡を小樽で確認できます。

北前船は海の道を通し産物や文化を小樽や道内にもたらしました。北海道の視点から北前船を見直すのは、北前船の意義のより深い理解につながります。

「合わせだし」文化生む

大阪市経済戦略局長　柏木（かしわぎ）　陸照（みちてる）氏

もともと関西の味付けはカツオやいりこなど魚ベースが多かったのですが、北前船の交易により北海道産のコンブを使う「合わせだし」が生まれました。

合わせだしは日本食の味付けを立体的にする画期的なものでした。だしを使った日本食の文化は現在、世界に広まりつつあります。

コンブはだしを取るために関西で使われましたが、（だしを取った後に）コンブを料理に変え、塩コンブやとろろコンブに変化させる「もったいない」という日本の文化も、北前船からつながっています。

繊維工業の源にニシン

岡山県倉敷市長　伊東（いとう）　香織（かおり）氏

倉敷市では、北前船で北海道から運ばれたニシンかすを肥料として多くの綿花を栽培でき、繊維工業が発展しました。その流れが現在につながっています。

倉敷市の児島地域では学生服やセーラー服は日本の約7割を、畳縁は8割を生産しています。ジーンズを初めて国産化したのも児島です。繊維工業の製造品出荷額は1千億円を超え、日本一となっています。

北前船の交易で栄えた町並みを保存でき、観光資源になっています。お世話になった各寄港地と、これからも交流したいです。

小樽の中高生が研究発表

潮見台中文化部
身近な神社にも足跡

北前船の身近な痕跡を調べ発表した潮見台中の文化部

校区付近にある住吉神社の第二鳥居を寄進したのは、日本酒の醸造会社「北の誉」創業者の野口吉次郎さんです。野口さんが本格的に醸造を始めたのは明治35年（1902年）です。

鳥居の奉納者には石川県加賀市の北前船船主の名前もありました。鳥居の石は岡山県産で、北前船で運ばれた可能性もあります。

北の誉酒造は小樽での醸造を終えていますが、醸造所跡には建物が残っています。仕込み水の井戸もあり、お酒の醸造に必要な良い水があったと分かります。

北の誉だけでなく、小樽には日本酒の醸造所が勝納川沿いに多くありました。明治38年の統計から、北前船が最も多く運んだ物が、日本酒の原料でもあるおコメだと分かりました。

小樽には、かつて100軒以上の菓子店がありました。当時の北海道にはないお菓子の材料が北前船で豊富に運ばれ、たくさんの菓子店ができたのです。餅店は現在も7軒あります。

北前船が来なくなった後も、北前船で運ばれた物が倉庫や神社、お酒や餅など身近な所に残っています。

小樽未来創造高
四つの活用法を提案

北前船の活用法を提案した小樽未来創造高の生徒

日本遺産認定の趣旨を受け、北前船の活用法を四つ考えました。

①北前船レース　事前に参加者にラジコン型の船を作ってもらいます。「北前船の日」を制定してレースを開催し、製作した船の速さや芸術性、北前船の再現度を採点して競います。

②北前船のキャラクター　北前船をモチーフに擬人化したキャラを作ります。名前は「北船前太郎」。すぐに北前船と分かる親しみやすい名前です。小樽市で行われるイベントに参加し、北前船をPRします。

③北前船関連の商品製作　北前船で運ばれたコンブやニシン、塩などをつくだ煮にして商品化します。

④北前船弁当　各寄港地の特産品を使用した弁当を作り、全国の寄港地45カ所で販売します。

今回の発表を通し、北前船が小樽を発展させた歴史を再認識しました。私たちの提案が地域発展の足がかりになるとうれしいです。